

2022年度鳴門市人権地域フォーラム(記録)

テーマ 「ひとつごと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■とき 2022年8月19日(金)13:30～15:30

■ところ なるちゃんホール(ポートルース鳴門 メインスタンド1階)

コーディネーター	森口 健司	T-over人権教育研究所共同代表・松茂中学校教諭
パネリスト	吉成 正士	T-over人権教育研究所共同代表・八万中学校教諭
	佐川 佳織	人権を語り合う中学生交流集会運営委員・瀬戸中学校指導教諭
	佐賀みこと	2015年度「人権を語り合う中学生交流集会」実行委員長 (現:京都芸術大学 芸術学部 舞台芸術学科 4年)

《司会者》

皆様、こんにちは。只今より、2022年度鳴門市人権地域フォーラムを開催させていただきます。本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で残念ながら、パネリスト、コーディネーターの関係者のみでの開催となっておりますが、その様子を動画として記録し、ご希望の方への配布という形でお届けしたいと考えております。よろしくお願ひいたします。

また、本日は、手話通訳を、特定営利活動法人『あたたかい手コラボ』の皆様をお願いしております。どうぞよろしくお願ひいたします。

はじめに、主催者を代表いたしまして、鳴門市教育委員会教育長 三浦克彦よりご挨拶を申し上げます。

《主催者代表 開会あいさつ》

皆様、こんにちは。鳴門市教育委員会教育長の三浦です。本日2022年度の鳴門市人権地域フォーラムを開催いたします。しかしながら、今、ご案内にもありましたように、新型コロナウイルス感染症拡大により、この度の開催は、フォーラムの様子をDVDに収録をして、そして、希望の皆様へ配布をするという形での開催といたします。参加を本当に楽しみにされていた皆様には、本当に申し訳なく思いますが、ご理解の程をよろしくお願ひします。

さて、この会ですけれども、人権尊重社会の実現を目的に、毎年(壇上に張り出されているテーマを示しながら)ここにあります『ひとつごと』から『わがこと』へ」というテーマで開催をしております。フォーラムの持ち方としては、毎年森口健司先生にコーディネーターをお願いをして、パネリストの語りへ寄せて、フロアの参加者の皆様に自らの思いを語っていただくという形での開催をしております。

本日もパネリストに3名の皆様をお招きしております。(壇上のコーディネーター・パネリストに身体ごと向け、丁寧にお辞儀をしながら)森口先生、パネリストの皆様、よろしくお願ひします。(登壇者より「よろしくお願ひします」と頭を下げながらあいさつが返る)それから、フロアの方にも、本日は中学生・高校生をはじめ、「T-over人権教育研究所」に関わる12名の皆様が参加をしてくださっております。(フロアの参加者に向かって頭を下げ)どうぞよろしくお願ひします。

終わりになりますけど、本フォーラムが参加者の皆様にとって、そして、DVDをご覧になっている皆様にとって、同和問題をはじめ、様々な人権問題を「わがこと」としてとらえることのできる、実り大きいものとなりますことを祈念いたしますと共に、本日の開催にご尽力をいただきました皆様に、深く感謝を申し上げます。それでは、本日はよろしくお願ひいたします。(丁寧深く頭を下げあいさつを終える)

《司会者》

それでは、本日の人権地域フォーラムにお招きいたしました講師の皆様方を、ご紹介させていただきます。向かって右側から、本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます、T-over人権教育研究所共同代表の森口健司さんです。続きまして、パネリストの方々をご紹介させていただきます。

(名前を読み上げられる毎に登壇者が立ち上がりあいさつをする)

T-over人権教育研究所共同代表の吉成正士さん。

人権を語り合う中学生交流集会運営委員・瀬戸中学校指導教諭 佐川佳織さん。

2015年度「人権を語り合う中学生交流集会」実行委員長・京都芸術大学芸術学部舞台芸術学科4年の佐賀みことさんです。

それでは、森口さん、以後の進行につきまして、よろしく申し上げます。

《コーディネーター 森口健司》

皆さん、こんにちは。(フロアーより「こんにちは」声が返る)T-over人権教育研究所共同代表・松茂中学校の森口です。

(ゆっくりと、一言一言に思いを込め)全体学習という、子どもたちが心の底に秘めてきた本音を語るという人権学習を1990年に始めました。その取組が、私たちの人生を本当に豊かなものにしてくれました。その営みを、「大人の人権学習の場で」という形で、この鳴門の人権地域フォーラムで、パネリストの語りに寄せて、集まっていた皆さんが、それまで誰にも語ったことのないような思いを、生き生きと表現する。そういう人権学習になってきました。

「ひとごと」から「わがこと」へ、自分の言葉で自分のことを語れた時に、私たちの人生は本当に変わります。今までずっと卑屈に捉えていたことが、マイナスにしか捉えられなかったことが、大きなプラスに変わってきます。私は、教師になって41年になるんですけど、「部落差別をなんとかしたい」という願いの中で教師を志し、41年という教員生活の中で、「こんな出会いがある」「こんなつながりが生まれてくるんだ」本当に喜びにあふれていく1年1年を積み上げていくことができました。

(力強く)人権教育は喜びです。仲間とつながっていける。本当に「信頼」と「尊敬」の中でつながる子どもたちの姿に、いつも感動を味わってきました。今回、映像を通して多くの方にその思いを届けていくことができるというのは、本当に喜びです。共に歩んできた仲間と、この人権教育に寄せる思いを多くの人に伝えていきたいと思えます。

まず最初に、このフォーラムは、3人のパネリストの語りを受けて、フロアーの皆さんとも思いを共有し、学びを深めていきます。私は、この鳴門市人権地域フォーラムに関わって19年目になります。今年はコロナの感染拡大のため、非公開となりました。参加を予定されていた皆さんには、収録した映像を見ていただくこととなります。

まず、冒頭に、「T-over人権教育研究所」からのメッセージを、皆さんに聴いていただきたいと思えます。この仲間の込めた思いがメッセージに集約されています。それでは、スクリーンをご覧ください。

《音声:スクリーンの言葉》

T-over人権教育研究所

「ひとごと」から「わがこと」へをテーマに、1990年度板野中学校において、学年全体で語り合う人権・部落問題学習(全体学習)に取り組み始めました。

語り合いの人権学習で中学生に常に問うてきたことは、「本音で語り合う」ことでした。言い換えれば、自分の中に
ある本当の思いを素直に伝えること、表現することです。

これは、そうなることを願いながらも、なかなか実現できるものではありませんでした。では、どうすれば可能となっ
てきたのか。

答えはシンプルでした。「教師が本音を語る」です。「こんなことは絶対人に言うことはない」と思ってきたことをま
ず教師から語っていったのです。それは、「教師が解放されずに、子どもたちが解放されることはない」との考えから
でした。

「プライベートな問題だから」と言って、ありのままの自分を殻に閉じ込める風潮があります。でも、そうすることで、
人はどんどん孤立していきます。

その殻を敢えて突き破ることによって、自己を解放していく姿を、子どもたちに伝えていきました。

その教師の姿を通して、子どもたちもありのままの自分を語っていきました。本音を語りはじめました。自分の中に
ある本当の思いを素直に伝えること、表現することの大切さに気づいていったのです。すると変化が起きました。

自分の未来を、仲間の未来を、共に描いていこうとする力強さに満ちていったのです。生き方が変わっていったの
です。それは子どもたちの未来が変わることでもありました。

私たちの周りは、まだまだ解放されない現実で溢れています。そんな現実を変えるためにも、本気の人権教育が必
要と考えます。

そんな「わがこと」を語り合う人権学習が広がっていくことを願い、その必要性や有効性を伝えるため、T-over人
権教育研究所を設立し取り組んでいくことにしました。

《コーディネーター 森口健司》

(しみじみと)「峠を越える。互いに越える。共に越える。じっくりと語り合う」本心を語り合う人権学習
は、私たちの人生を本当に豊かなものにしていきます。価値観が変わっていきます。この後、この「T-over
人権教育研究所」を立ち上げてくれた共同代表・八万中学校の吉成先生に、「人権文化をすべての教育に」
をテーマに語っていただきます。彼のメッセージを先に届けたいと思います。それでは、皆さん。スクリー
ンをご覧ください。

《音声：スクリーンの言葉》

1922年3月3日、京都岡崎公会堂で水平社が創立されて、今年で100年。それにあわせ、映画「破戒」が全国ロ
ードショーされ、来年には「福田村事件」も映画化が準備されています。

あの日から100年。この国はどこまで差別と向き合ってきたのでしょうか。差別に立ち向かう文化を、本気で醸
成してきたのでしょうか。アリバイ的な取り組みになってはいないでしょうか。

「このような学年全体で語り合う人権学習は、とても大切に貴重な会だと思いました」

「小学校まで人権学習に取り組んできて、今回も似たようなことをすると正直思っていました」

「語り合うことでその人のことを知ることができ、自分の視野を広げることができました」

5月に実施した1年生全体人権学習の生徒感想の一部です。

これまでの積みあげを検証し、よりよい取り組みとして子どもたちに提供することが、アリバイから本気に、一部か
らすべてにしていく道筋のように感じます。そこには必ず、「語り合い」というプロセスが必要です。呼吸をするように、
みんなで語り合いましょう。

《コーディネーター 森口健司》

メッセージの中で紹介をしていただきました。映画「破戒」の予告編を見ていただき、映像の後にお話をさせていただきます。この作品に込められた思いは、今でも私の心をグッと刺します。1分余りの予告編です。ご覧ください。

《動画》 映画「破戒」予告編

(映画予告編は、1人の男性の心の叫びから始まる)

丑松:「なぜ、好きな人に気持ちを伝えることができない！」

(画面上に「不朽の名作 島崎藤村 「破戒」 60年ぶりに映画化」の文字)

(画面が変わり、明治の時代、店先で、大勢の人から罵倒され、塩をまかれ、追い出される男性の姿が映し出される)

《映画:ナレーション》

生まれだけで差別されることが当たり前だった時代。(音声のみにて主人公・丑松の父の声が聞こえる)

丑松の父:「いいか。丑松。部落民だという素性を隠せ」

《映画:ナレーション》

身分を隠して教師となった丑松に訪れた出逢い。

(青年へと成長した丑松が映し出され、やがて寺の境内で寺の住職の娘 志保と語り合う場面へと変わる)

志保:「この寺の娘の、志保と申します。」

丑松:(遠くを見つめるように)「志保……」

(丑松と志保の寄り添う姿と「自分らしく生きたいという望みができた」という文字が浮かび上がる)

(素性を何も知らない仲間からの「お志保さん、嫁にもらえよ」の言葉)

《映画:ナレーション》

しかし、誰にも心を許してはならない。差別というものは、人の心から簡単に消えはしないような気がするんだ。

(男性と向き合い、心に閉じ込めてきた思いを、心の叫びとしてぶつける丑松の姿がある)

丑松:「この世の矛盾に、命懸けで切り込む人間を下等だというのなら！私は進んで下等な人間になります」

(教室で、子どもたちを前に、父から言われ続けた戒めを破ろうと決心した丑松の姿がある)

丑松:(まっすぐ子どもたちを見つめ)「今日は、皆さんにお話があります」

(様々な場面が現れる中)

《映画:ナレーション》

この静かな劇場は、やがて、希望へとたどり着く。

(画面いっぱいに「破戒」の文字が浮き出し、7月8日全国ロードショー公開の文字にて予告編終了)

《コーディネーター 森口健司》

私自身、「部落のことは誰にも言うたらあかんよ」そんな思いを私に語ってくれた祖父や祖母の言葉がやっぱり心にあります。でも、その私の人生観が、(力を込めて)この教育によって大きく変わった。それはやっぱり、同和教育・人権教育の成果です。そんな思いを込めて、吉成先生に「人権文化をすべての教育に」をテーマに語っていただきます。それでは吉成先生、よろしくお願いします。(会場から拍手)

《パネリスト吉成正士》

1 映画「破戒」について

こんにちは。(会場から「こんにちは」声が返る)吉成です。短い時間ですが、よろしくお願いします。座ってお話しさせていただきます。ちょうど、1カ月くらい前にこの「破戒」という映画を観に行く機会がありました。観てきました。7月8日に全国一斉ロードショーだったんですけど、徳島では残念ながら上映されていません。四国でもまだ上映されていないと思います。中四国で広島だけだったと思います。

1カ月くらい前に県外に行く機会があったので、観てきたわけなんですけど、ストーリーをご存じの方ばかりではないので、簡単に言いますと、今年が「水平社創立100年」ということもあって、今が2022年ですから、1922年ですね。大正11年に水平社が創立されました。さらにさかのぼること16年前に、1906年に島崎藤村が小説「破戒」を自費出版しました。

(一言一言をかみしめるように、じっくりと)水平社ができるさらに前ですから、部落差別が厳しい時代だったわけですね。そんな中で、どんなストーリーかという、さっき、映像に出てきていましたけど、主人公の丑松という人物が、映像に出てきた通りなんですけど、幼い時からお父さんに「部落であるということ隠せ」という戒めをずっと受けて育っていくわけです。

そして、その素性を隠したまま小学校の教員になっていくわけなんですけど、そこでも隠し続けていく。隠すことの苦しさですね。(会場に問いかけるように)本当に隠さなければいけないだろうか？隠したくない思いもあつつつ、けど、素性を明かすことで自分の身に何が起ころのかということも、大体想像がつく。その葛藤が描かれているわけです。

その場面なんですけど、わかる方はわかるかもしれないんですが、一つの場面に丑松の部屋が出てくるんですね。そこに同僚が訪ねてくるんです。訪ねてきた時に、主人公の丑松の書棚に部落差別関連の書籍があるわけです。丑松はそのことについて調べたかったんです。「自分はいったい何者であるのか」「どうすれば部落差別をなくせるのか」ということを、やっぱり考えたいし、研究をしたいし、その書物が書棚に並んでいるんですが、同僚が来た時に、ばれるんですね。「どんな本を読んでいるのか」みたいなことを言われて。つまり、自分が読んでいる本のことについても明かせないということですよ。それが116年前に書いた島崎藤村の小説の中の一節です。

2 「中学生集会」で語った、教え子シンジの生き様を通して

(気持ちを切り替えるように)中学生集会の話が先程から出てきているんですけども、先月おこなった中学生集会に、(手振り身振りを加えながら)こんなふうにパネリストとして、教え子のシンジっていう子に登壇をしてもらったんです。もう41歳になる教え子なんですけど、彼が会うたびに言うのは、41歳ですよ。明治時代じゃない、今です。彼の家書棚に、我々がずっと実践記録としてまとめてきた「峠を越えて」という本があるわけです。その「峠を越えて」もそうだし、中学生集会の報告書もそうなんですけど、それを見えるように、わかるように並べているんですね。

それは、シンジの誇りなんです。自分がこの世に生を受けて生きてきた、生まれて生きてきたという誇りでもあるし、その中を生き抜いてきたお父さん、お母さんの生きざまを示すものでもあり、だから、証なわけです。ですから恥じるものでもなく、誇るべき本です。隠したくないわけです。

(一言一言をじっくりと問いかけるように)ところが、それを連れ合いさんのお父さんから、度々、「もう、そろそろその本は他のところにやったらいいんじゃないか」という話をされるって言うんです。なぜか。子どもが物心ついて、もう大きくなってきたからと言われる、その葛藤です。

(じっくりと)島崎藤村は、「破戒」の中で、明治時代のことを書きました。でも、結局今も、似たような

状況があるってことです。なぜ、今、水平社創立から100年経って、映画「破戒」がリニューアルされて上映されるのか。やっぱり、まだ、我々の中に部落差別意識があるんじゃないかっていうことの提起のような気がするんですね。そういう視点で映画を観るということは、すごく重要な意味があるんじゃないかという気がするんです。徳島でも早く上映されるといいなと思っています。

3 「YOASOBI」の曲「夜に駆ける」に寄せて

(一言一言を上の方を見上げながら、紡ぎ出すように)映画「破戒」の持つ意味もあるんですが、「それは、特別なものなのかな」ということを、僕はこの間考えてきたんですけど、昨晚、テレビを見ていて、YOASOBIさんね、夜遊びする人じゃないですよ。YOASOBIさんの「夜に駆ける」っていう曲がありますね。あのイラストレーターのことがニュースで報道されてたんです。藍にいなさんというイラストレーターが、YOASOBIさんの「夜に駆ける」のミュージックビデオのアニメーションを書いていることについて。

その、藍にいなさんがこの度イラスト集を発行した。タイトルが「羽化」なんです。「羽化」というのは蝶がサナギから成虫になる、あの「羽化」ですよ。(考えながら)そういう願望みたいなものを、現代社会が持っているんじゃないかということです。我々が常に持っている固定観念などを、脱ぎ去ってしまいたい願望というのが現代社会の中であって、例えば現代社会の中であって。(会場の仲間に関わけるように身振り手振りを加えながら)あの、ゴグルみたいなものをつけて見るのを何て言うんですかね。ああ、VR、VR。あれを通じて、自分のアバターを持つというのをどこかで聞いたことがあるかと思うんです。あのアバターを持つことによって、自分のありのままを出せる。自分の素を出せるという、そういうふうな話も聞きます。(力を込めて)つまり、私たちは、本当の自分の素を出したいんだけど出せない世の中で、何とかして、それでも自分のありのままを出そうとしている社会なのかなっていう気がするんです。変わりたい願望。そういうものがやっぱりあるんじゃないかということです。と考えたら、「破戒」にしても「戒めを破る」でしょ。100年経っても、人間は同じことをやっているんだなという気がします。同じことをやっているし、同じことを望んでいる。そこをどう実現化させていくのかという話のような気がするんです。

4 「学習会」が問うてきたものと、今の状況

(気持ちを切り替えるように、声のトーンを少し上げて)話は変わるんですけども、現実問題として、私たちがずっとやってきたものとして、「学習会」という制度がありました。わかりにくい方がおいでるかもしれません。正式名称は「同和対象地区学習会」です。「同和地区」というのは、もう法的にはなくなったので、被差別部落って言った方がわかりやすいかもしれませんが、小・中学生対象の「学習会」というものです。

「学習会」に関わっていた時間が、私はすごく長かったんですが、(3本の指を立てながら)当時、3本柱がありました。「生活習慣を身に付ける」基本的な生活習慣を身に付ける。「基本的な学力をつける」基本的な学力を身に付ける。あと、「同和問題・部落問題学習をしていく」この3つの柱を、仲間づくりをしながら進めていくというふうになってきました。

「学習会」という取組は、当時学校の取り組みとリンクしていたんですね。学校でも、当たり前のように同和問題・部落問題の学習を基本に据えて、今でいう「人権学習」をやっていたはずですよ。(語りに力が入ってきながら)それと、学習会のすごかったところというのは、同和教育に取り組むために、すべての学校に「同和教育主事」という立場の先生がいました。学校によっては、「同和担当教員」という教員もいました。要するに、1人か2人の教員がいました。

「解放教育」というとわかりにくいかもしれませんが、同和教育担当の教員がいたということです。なお

かつ、「学習会」が設置されている学校、すべてではありませんが、被差別部落を校区に持つ学校で「学習会」が設置されている学校には、「学習会専任指導員」という教員が、さらに配置されていました。それだけ教員が多かったということです。

ところが、法律が切れてから、「人権教育主事」に名前を変えて、そういう立場の人間は1人います。2人目はいません。「学習会制度」もなくなりましたから、「学習会専任指導員」という先生もいません。ということは、学校の教員の負担が高まったということです。そこもすごく大きい。なおかつ、学習会専任指導員を務めていた多くの先生が、これは臨時の教職員ですから、今、たくさんの正規の教員になっています。人権問題に理解のある、学習した教員が、今、正規の教員になっているわけです。

ところが、この20年はそういう教員はいません。「学習会」がなくて、「学習会専任指導員」の先生もいません。当時、当たり前のように学習会をして、当たり前のように「同和問題」「部落問題」について学習ができていた教員が、つくられなくなったということです。これが非常に大きい。マイナスの意味でね。

つまり、「学習会制度」というのは、すごい意味のあったことなんだなということを改めて思います。それがなくなるということは、今でいう、人権学習をリードするような、核になるような、焦点化されたような学習が、今、ないということです。いや、全くしてないということではないですよ。していますよ。してはいますが、当時ほど焦点化された、学習をグイグイとリードするような学習はないということです。どちらかというと、同和教育が人権教育になったことで、どこか、トーンダウンしている。

トーンダウンしていく一方で、どちらかというと、学校現場で、私は中学校の教員ですから、中学校のことで言いますと、どちらかというと「生徒指導」「学力向上」「進路指導」「部活動」今で言えば、「特別支援教育」「ICT教育」こちらの方に、大きくウエイトがシフトしてしまっているということです。

今、言ったすべての教育の中に、人権教育の視点は必要です。「ICT」であれば、SNSによる差別であるとか、部活動の中においても「仲間づくり」の視点は絶対必要ですし、「学力向上」であるとか「進路指導」についても、自分の将来像の獲得みたいところで、人権の視点は必要なんです。必要なんですけど、そこまで必要に感じながらされているかと言えば、そこは、ちょっと思えないんです。何か、「人権教育は別のもの」そんな気がします。やっぱり、「学習会」がもった意味の大きさを改めて感じます。

5 「仲間づくり」が果たすもの

もう一つ言えば、「仲間づくり」。仲間づくりの視点でやってきたということ。これが一番大きいかな。仲間づくりというのは、20年くらい前までは強烈にやっていたよ。学級でもやったし、学校でもやったし。今やっていないかということ、やっていないとは言いません。やっているとは思いますが、当時ほど熱くやっているかということ、そんなふうにも思えない。

果たしてそれでいいのかどうかということ、よくないように思うんです。というのは、何か事件が起きる、事故があるといった時に、その事件を起こした人、事故を起こした人が焦点化されて、その人が孤立していくとか、事件事故で孤独死の話があったりもしますね。

「孤独であったから」という話って、新聞やニュースで見ませんか？そういうのをなくしていこうと思っただけでも、では、思っているだけのことをやっているだろうかということ、そうじゃないんじゃないかなと私自身は思うんですね。

私は学校のことしかわかりませんから、学校のことしか言えませんが、もっと仲間づくりを前面に押し出していく教育・学習があるべきじゃないかなと思います。時間が来ましたので、とりあえずこの辺で終わります。

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。拍手しましょうか。(会場より大きな拍手)映画「破戒」に関わって、話したいことはいっぱいあります。

(精一杯の思いを込めて)学習会の話もしてくれましたけど、41歳のシンジは、小学校4年のお嬢さんを中学生集会に連れて来ました。そこで自分の立場を語ることを通して、小学校4年の娘に部落問題を教える場をつくりました。そんなことができる親というのは、本当にまれです。どういうふうに立場を自覚するのだろうか。いつ、そのことを知るのだろうか。

まさに、今問われている、人権教育の中身が私たちに突き付けてくるものは本当に大きいです。20年、30年前に部落問題を語り合った部落の子どもたちが、今親になって、小学生・中学生・高校生の子どもがいます。いつ伝えるか、どういうふうに伝えるか、そんな相談をやっぱり受けます。

「先生、中1の娘が人権作文を書きました。学校の代表として選ばれて、コンクールに出すんです。でも、部落問題のことはよう触れません。どうしたらいいんだろうか」と、やっぱり揺れます。差別の現実には深く学ぶということが、私たちにずっと問われて行くんだと思います。

この後、佐川先生から話をさせていただきます。昨年、大麻中学校卒業生の中川華那さんが、自分の結婚差別、姉妹の結婚差別にあった話をしましたが、その時に、「本気で語ってくれた先生によって自分は救われた」ということを彼女は語りました。その彼女の語りが、今回の佐川先生のパネリストとしての登壇につながってきました。

まず、瀬戸中学校の佐川先生のメッセージ「思いから言葉へ 言葉から心へ そして心から行動へ」を聞いていただきます。スクリーンをご覧ください。

《音声:スクリーンの言葉》

部落差別をしている家族に対して何も言えなかった中・高生時代。言っても無理だと諦めかけていた大学生時代。そんな私を、家族と真剣に向き合い、しっかりと関わっていこうと奮い立たせ、背中を押してくれたのは、教員になって出会った学習会の生徒たちや差別と闘っている方々の熱い思いと優しさでした。その思いを胸に、「自分自身と向き合い、思いを語り合うことができる優しい集団」をつくっていこうと奮闘する毎日です。

今日は、「人権を語り合う中学生交流集会」に参加することによって、集会の語り合いの中で自分の大切さに気づき、よりよい生き方を見つけた生徒の姿や、学校生活の中で見過ごされている偏見を、どのように生徒と共に考えているのかをお話できればと思います。

《コーディネーター 森口健司》

昨年登壇してくれた華那さん、華那さんだけでなく、出会ってきた子どもたちによって、私たち教師は変わっていきます。そんな思い、そんな営みを佐川先生に語っていただきます。佐川先生、よろしくお願ひします。皆さん、拍手をお願いします。(拍手)

《パネリスト 佐川佳織》

1 はじめに この会への参加に寄せて

瀬戸中学校で教員をしております、佐川と申します。座って話をさせていただきます。私は、こういう場で話をするのが初めてで、とても緊張して前でマイクを持っているんですけど、(会場の前の列に座っている中学生に眼差しを向けながら)今日はなんだかちょっと落ち着いているなあと思ったのは、前を見ると、

中学生の制服を着た子(T-over人権教育研究所人権こども塾のメンバーとして参加した中学生)が3人いて、この間まで中学生集会で見ていた顔が3人並んでいて、こんなにも落ち着けるものなんだなと思っています。

大人ばかりじゃなくて、中学生の姿というのは、私にとってすごくやる気を持たせてくれるんだなと思えて、(照れくさそうに)久しぶりに頑張ろうと思っています。

先程紹介してくれたんですけど、今日のテーマを「思いから言葉へ 言葉から心へ そして心から行動へ」としているのですが、私はこのテーマを考える時に、「思いから行動へ」というテーマをつけたんです。

今日は、この会に来てくださっている皆さん、見てくださっている皆さんに、どう伝えたらいいのかなと考えた時に、普段自分のしていることをということだったんですが、何を話したらいいのかなと考えた上で、一応、校長先生に「生徒のことをこんなふうにしちゃべろうと思うんですけど」と相談しました。

「先生が思っていることをそのまま今回のテーマにしたらどうか」とアドバイスをいただいて、「ああ、そうか」と思いました。

私は結果を先に言うタイプの人間なので、生徒にもいつも話をするんですが、いっぱい思いはあるんだけど、その思っていることって、なかなか相手には伝わらない。思いだけでは伝わりにくい。だから、思っていることを態度に表して、たとえば、それが「思いやり」という形になったりとか、何か語ったり、伝えたりすることが大事で、それが心に伝わる、心を動かす。心で感じることができれば、次は、自分が何かしようかなとかいうように、行動に移るんじゃないかなということを、私も信じて、いつも人権教育に取り組んでいます。

2 出会いを通じた一例 識字学級との校外学習から

今日は、この中でも、私は、「人権教育って出会いだなあ」といつも思っているので、今日は、3つほど私の人権教育に対する出会いを紹介できたらなと思います。

1つ目は、私は瀬戸中学校の2年生を担当しているんですが、1カ月前に、識字学級に校外学習に行ってみりました。

その時の、帰って来てからの生徒の感想をすこし紹介します。

「正直、識字や部落差別の学習をしている時、なくさなくてはいけないとわかっているけれど、そこまで細かく深く学習しなくてもいいんじゃないのかと思っていました。でも、今日、識字生の方とお話をして、こういう僕の考えが部落差別のあり続ける理由の一つなんじゃないかなと思ったので、この考えを改めていきます。」

という感想を書してくれた子がいました。

彼は、私のしている授業を「そこまでせんでもいいんとちゃうか」くらいに思って聞いていたんだなとわかって(苦笑いしながら)少し反省したんですが、ただ、識字生や協力者の方の語りによって、40人の子どもたちの心がすごく動きます。熱い思いに耳を傾けて、何か返したくなるような、そんな空間があるんですね。いろいろ中学生も質問しますし、中学生が質問されることもあるんです。

その時に、教室での発表とは気持ちが違うというか、本当に自分のこととして一緒に考えていきたい、寄り添いたいという感想を言うんですね。だから、スラスラとは出てきません。本当に、何も知りませんから、一生懸命考えて言葉にして伝えようとしています。

私は、授業だけでは心を動かすのは難しいなと思っていて、こういう、2時間ちょっとの小さい出会いなんですが、彼らの人生にとってすごく大きい財産になるというか、大きい影響がある。何かした時に、間違っていることとか、何かそういう「部落差別」という言葉が出た時に、この校外学習のことが「いや…」と、

立ち止まれるような経験になったのではないかと、やはり出会って大事だなと、つい、1カ月前に思いました。

3 学習会の取り組みと参加していたYちゃんとの関わり

2つ目は、先程吉成先生が言ったように、学習会ということについて、瀬戸中学校に来る前は、私も勤務した学校が、すべて学習会のある学校だったので、私もすごくいろんな生徒の顔が浮かんでいきます。その中でも、私が一番最初に出会ったというか、私が、こうしてここに立って頑張ろうかなと思え、教員として頑張りが続いているスタートの出会いがあるので、それを今日は少し聞いてください。

(当時に思いを馳せるように)私が学校の先生になって、新任教員として初めて担任をした生徒のYちゃんという、すごくかわいらしい笑顔がたっぷりの女の子がいたんですが、その当時は、「学習会」というのが週2回、夜におこなわれていました。人数が多かったので、学年ごとに学習会をしていました。勉強をしたり、当時は同和教育だったんですが、人権学習をしていました。

(楽しそうに)「今日の同和教育の勉強はどうだった」みたいな話をして、「あれはあかんわ」のような会話しながら、「じゃあ、来週はこうするわな」というような、作戦も練りながらやったのを覚えています。

その学習会の行事の一つだったと思うんですが、地域の方から、差別の実態・現実について、お話を聞く機会があったんです。その中で、結婚差別の話が出てきました。「差別によって別れなければならなかったんだ」とか、「家を出たきり会えてない」とか、「命を落としてしまったこともある」など、本当に厳しい、重いお話でした。

そのYちゃんも、その時は「そうか」みたいな顔で聞いていたんですが、夜も遅かったので、家が近いので、家まで歩いて帰りよったんですが、いつもより足が重いんですね。

ゆっくりというか、今思えば「とぼとぼ」という表現がいいかなと思うんですが、一步一步歩きながら、ゆっくりゆっくり言うんです。

「先生」

「うん」

「さっきの話してみたいにな」

「うん」

「私もな」

「うん」

「差別に会うのかな」

と言われて、すぐに返せなくて、「うーん…、わからん」って言いました。

「わからんけど、差別する方が悪いんじゃないけん、Yちゃんは何にも悪いことはしてないんじゃないけん、一緒に頑張っていこう。勉強していこう」という話をしました。彼女のお母さんはとても協力的な方だったので、「ママもおるしな」みたいな感じで送り届けました。

私が、はっきり覚えているのは、帰り道の運転する車の中で、涙が止まらなかったことを、今でもすごく覚えています。それが、私の頑張っていこうと思う一番最初のスタートでした。

先程のメッセージにもあったんですが、自分が働き出して、そういうYちゃんとの出会いがある。でも、家に帰ると、それとは全く反対の家族がいる。人権教育の活動に参加するのを、「何で行くん？」という家族との、何て言うんでしょうか、上手くいかない中で、よくケンカしたなという記憶があります。

当時は、ケンカになるんですね。今ならもうケンカにはならなくていえるんですけど、当時は、自分でもよくわかっていなかったんでしょう。すぐ、腹が立ってケンカになるんですね。そんな新任教員時代があり

ました。

4 「中学生集会」との出会いと自分自身の変容

(気持ちを切り替えるように)そんな思いで、私が初めて中学生集会に参加したのが、今から17年くらい前だったんです。先程、森口先生から紹介があった華那ちゃんのお兄ちゃんを私は担任をしまして、お兄ちゃんが「中学生集会に行く？」っていうのを言ってくれました。

(声を弾ませながら)大麻中学校は、2回目の勤務であったのに、中学生集会のことを知らなくて、「そこでどんなことをしよるんか、先生見に行くわ」という感じで軽く行ったんですが、この中学生集会というのが、私にとってすごく衝撃でした。まず思ったのが、「何で、この会のことを、もっと早く私に誰も言ってくれなかったん」ということです。そんな思いがしました。

もう一つは、当時の中学生、華那ちゃんも入れて、27～28歳になる子たちの、すごいパワーです。

「こんなにしゃべるんだ」

「こんなに思っていることをぶつけ合えるんだ」

とすごくびっくりもしました。それと、「こんな人権学習したいな」、当時は「同和問題学習」だったんですが、こんな人権学習がしたいなと思いました。

自分のクラスで、そういう授業がしたくて、「早く学校が始まらないか」と思いました。夏休みに入ったばかりの集会で、学校が始まるまでまだ1カ月以上もあるのに、早く始まらないかと思ったのがきっかけで、それから、ずっと毎年、中学生集会に参加をしています。

5 瀬戸中学校で中学生集会に参加したMさんのこと

瀬戸中学校に今年6年目になって、たくさんの人と出会ってほしいという思いで、瀬戸中学校の子もあの輪の中に入ってほしいなという願いで、声をかけて一緒に参加をしています。その参加している生徒がとても魅力的に考えるんですね。それを今日紹介したいなと思って、いっぱいあるので、2つの例だけ聞いてください。

まずは、Mさんという子がいるんですが、彼女は、中学3年生の時に中学生集会で作文を読みました。少し内容を読むので聞いてください。

私は1年生の時、先生から「意図的に友達を一人にして、いじめていたのはMさんだよ。良く考えてみて」と、突然言われて頭が真っ白になった。信じてもらえなかった。自分を理解してくれる尊敬している先生からの言葉だったからだ。先生が信用できなくなった。友達からもいじめをしたと見られて、教室で一人であることが多くなった。何もする気が起こらず、授業中にも何もしない、先生に反抗する日が続いた。

という様な作文を、実は、校内の人権作文に彼女が書いてきました。彼女は、当時は本当に言葉がきつくて、その先生を攻撃するような、「許さない」というような内容でした。担任の先生からその作文を見せていただいて、「これ、どうにかせなあかんあ」という相談をしました。

すると、「実は2年生の時にもこれを書いてきているんですよ。」と言われました。同じ内容の作文だったそうです。彼女の中では「これをどうにかしたい」という心の叫びだと思って、彼女の話を知ると同時に、「中学生集会に今年行ってみないか」と、6月に誘いました。

そして、中学生集会に行くと、きっと彼女も、さっきの私と同じような衝撃を受けたんだと思うんです。「こんなに話しやすい空間もあるのか」と。教室で言えないんですね。自分の思いを。自分は、いじめたと

された子が同じクラスにいて、自分をいじめっ子だと思っている集団が同じクラスにいて、自分1人、その中で上手く伝えることができないということだったので、「その思いを作文に書いて、中学生集会で発表して、他の学校の子に聞いてもらおう」ということになりました。

彼女は、中学生集会の実行委員会に行く度に、作文を書き替えるんです。そしたら、彼女の言葉がだんだんと変わってきました。最初は、「むかつく」とか「許さん」とか、「自分の人生台無しにされた」とか、きつい言葉だったんです。(一言一言を大切に、生徒の気持ちに思いを馳せながらゆっくりと)それが、「信じてもらえてなかったんだ」という様な表現になったり。

彼女は、無視したり授業をボイコットしたそうです。その先生の教科は、教科書も何も出さずということもしたそうです。でも、ただ単に先生に気づいてほしくて、話がしたくて、信じてほしかったんだというだけのことだったんです。

彼女は、本番ではなく、前日のリハーサルにその作文を読ませていただいたんです。自分の思いを中学生集会で話をすることによって、その時に会場の子から、「私も、同じような経験があるんだ」とか、「私も先生を信じられんようになったことがある」とか、「私もずっとその先生のことが嫌いなんだけど、Mさんみたいに言えたらいいな。私もそんなふうに考えたらいいな。すごいな」という返事を返してくれたんです。

本当に、森口先生がおっしゃる「仲間の語りが癒してくれる」ということを、「ああ、これか!」と私はすごく感動しました。その子が最終的に書いた作文ですが、「先生、こんなんでもうですか?」と言って持ってきた文章を、今から言いますね。

今までの私の考え方が、私の心の成長を止めてしまう行動だと気づきました。自分一人だと思っていたんだけど、心配してくれる両親や先生がいたことに気がつきました。今回の経験から、私は「人を大切にする」「信頼される人になるためには努力をする」ということを心に決めました。

という文章を、当日書き替えてきて読みました。

学校の中ではどうにもならなかった状態だったんですが、中学生集会に参加することによって、自分自身と向き合って、とても前向きに考えられるようになって、中学生のパワーというか、今日もこの後話をしてくれると思うんですが、彼女を変えてくれたというのがあって、本当に良かったなあ。いい出会いだったなあと思っています。

(時間を見ながら)中学生集会についての話になったですけど、華那ちゃんの話はもしまた機会があったら話をさせてください。長くなりました。ありがとうございました。(会場から大きな拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。人権を豊かに学ぶ関係というのは、本当に幸せな世界を私たちに届けてくれます。この後、佐賀みことさんに話をしてもらおうんですけど、彼女は中学3年間、中学生集会に関わり、実は、この鳴門の人権地域フォーラムにも中学1年からずっと関わってきました。そういったことができる中学校に居ったことが、やっぱりすごいことだと思うんです。そういう中学校にしていけるだろうし、すべての子どもたちがそういう舞台に立てるような世界が、どんどんどんどん広がっていったらなあと思います。

人権教育というのは、本当に、子どもたちの可能性を、子どもたちの豊かな人生を、見事に創造していきます。人を大事にするということが自分をとことん大事にすることであるということが自覚できたら、子どもとの関係が、意識が変わります。

彼女のメッセージ、彼女の中学3年の姿がこの後出てきます。まずメッセージからです。出会いとつなが

りです。スクリーンをご覧ください。佐賀みことさん自身が、朗読したメッセージです。

《音声：スクリーンの言葉》

2012年、小学校6年で体験した森口先生の本当の思いや願いを語り合う人権学習から10年が経過します。あの出会いがきっかけで藍住中学校での3年間、人権を語り合う中学生交流集会や鳴門市人権地域フォーラムに関わり続けることができました。

私は、本当の思いを語り合う人権学習によって人の痛みを感じることができ、見なかったことにしてしまっていた自分の痛みにも、目を向けることができた気がします。また、過去に自分が知らずに手にしてしまった「刃の存在」に気づき、それをへし折ることだってできると思えました。

私にとっての人権活動は、人を知り、世界を知り、自分を知るための営みであり、また、人や社会とコミュニケーションを重ねる行動そのものです。フォーラムでは「一对大勢」ではなく、「一对一」で、「私と目の前のあなた」で、この瞬間を全力で向き合っていたと思います。どうぞよろしく願いいたします。

《コーディネーター 森口健司》

彼女は今、大学4年生です。私自身の大学4年を振り返ったら、本当に情けない話ばかりあります。情けない姿ばかり浮かびます。本当にこの教育というのは、子どもたちを生き生きさせていくんだと思います。

彼女は、中学生集會に中学1年から関わっているんですけど、中学2年の時、彼女が応募した中学生集會のキャッチフレーズです。選考会で彼女のキャッチフレーズが選ばれました。

「みんなの心を幸せに！ 世界を「平和」に染めていこう」

まさに、今の世界にもっとも問われている言葉なんだろうなと思います。

その年のポスター原画も彼女の作品でした。(映像として、ポスター原画の中学生集會の報告集の表紙が紹介される)中学3年の時の中学生集會、彼女の語りを見てもらいます。(楽しそうに)なかなか横にいて、その映像を使っていいかと言って、「いいです」という人は少ないと思います。(佐賀さんとコーディネーターの明るい笑いがこぼれる)いつ見てもグッとくる語りです。

実行委員長を務めた中学3年の中学生集會、閉会行事での4人の実行委員長の最後の語りです。身体全体を使って語る、その語る姿は今も変わりません。

《動画》 2015年度人権を語り合う中学生交流集会 実行委員長・佐賀みことさんの語り

(手振り身振りを加えながら、笑顔で生き生きと)今日も一日、ありがとうございました。なかなかない貴重な体験をさせていただきました。この会に1年・2年・3年と参加できたことがすごいと思います。

朝に言ったこと、不安に思ったことが申し訳ないくらい、みんなすごかったです。毎年すごいですけど、今年もすごかった。今年は大人の人も高校生の人もたくさんいて、中学生もたくさんいて、いろんな意見を発表してくれて、なかなか意見を言う隙がなくて、うずうずしてたりしたけど。

みんながそれだけ考えていることが(笑顔の中で涙を懸命に我慢しながら)ほんまにほんまに嬉しかった、ほんまに感動して、みんなを信じるってことを、今日知ったような気がします。吉成先生が教えてくださったんですけども、(涙で詰まりそうになる言葉を、笑顔と涙でくしゃくしゃになりながら懸命につなぐ)手話でこうすれば信じるって意味なんですけども。

(顔を覆い涙する佐賀さんと隣の実行委員長が励ましながら見守る)今日が最後なんが寂しいというか、高校

生になっても来ようと思うんですけど、この会は自分にとって大事やし、この会なしやったら今の自分はおらんかったんですよ。得たものも大きいし、こんなにみんなもおって、ほんまに感謝の言葉がいっぱいです。それぐらいみんなのことが好きやし、この会も好きやし。本をもらったら何回も何回も読もうと思います。ありがとうございました。

《コーディネーター 森口健司》

中学生が生き生きと語る姿は、本当に心が熱くなります。本当に幸せにしてくれます。それがやっぱり人権教育の喜びだと思います。現在、京都芸術大学で舞台芸術を学んでいるいろんな舞台に立っています。その場面の写真を1枚提供してくれました。

この舞台の中心にいるのが佐賀さんです。こういう舞台に立っているということをこの後、話をしてくれます。それでは、佐賀さんいきましょか。熱い熱い拍手をお願いします。(拍手)

《パネリスト 佐賀みこと》

1 はじめに

こんにちは。佐賀みことです。よろしくお願いします。(登壇者の方を見ながら、ニコニコと)良かったら、先生も皆さんも入ってくれて全然いいので。1人でマイクでしゃべるとよくわからないかもしれないんで、突っ込んでください。

(前に向き直って)基本、この会で自分がしゃべることは、今、考えていることが絶対、あとで変わってくると思うので、参考程度で、この人は今こんなことを考えているんだくらいで、そんなふうによく受け取ってもらえたらと思います。

先程もたいそうな、豪華な紹介をしてもらったんですけど。中学生の時、中学生集会に3年間参加させていただいて、高校生になっても何回か遊びに行ったりとか。あと、中高生集会に行つて。その後、人権の活動をずっと続けてって感じで。今は大学に通つて、人権教育の場に出向くこと、正直、高校生までよりは減っているんですけど。例えば、セクシャルマイノリティの方々と一緒に遊びに行ったりとか。あとは、舞台の戯曲の中でいろいろな社会問題とかが出てくるから、そこで勉強するためにどこかに行つてみたりとかつていう形が、今の人権活動の具体的な行動です。

2 私の捉えた「教育」ということ

～先行する「情報」の壁～

今日、何をしゃべろうかなあつて考えたんですけど。「人権教育」つていうふうに考えたら、今の年齢になつても何かよくわからないつていうか、「教育」つて言われたとたんに身構えるつていうか。それは、学生の時のそうだし、今も変わらないんですけど。今も、先生の話聞いてて思ったことを言つていくつていう感じになるんですけど。

情報つて、今の社会にあふれているし、学校で習うのも全部情報じゃないですか。言つてしまえば。そういう情報つていうのは、結構どうやつても得られるものやけど、心とか気持ちつて、情報では得られないと思うんですよ。想像はできるけど、具体的じゃないつていうか。それが結果、さつき吉成先生が言つた、「固定観念を脱ぎ去りたい」つていうところとつながつていて、情報が先行するから、自分の本当のところにあるしんどいものより先に、「情報」「情報」「情報」つてなつて、厚い「情報」の壁が、どんな立場のどんな人にでもある気がするんです。

どうしても、「教育」つてなると、「情報」を教える方がイメージとして強い気がして。それも自分が中学生や高校生で、学校でやつた人権教育はそつちだった気がして。それだと自分の考えが出て来なかつたりし

て。上っ面ってというか、上の方をスッと通る気がして。この中学生集会は、情報を提供されたり、与えたりと、そういうことじゃなくて、「生身の人の心を知る」みたいな方がすごく大きかったなと思ってて。

そのこと自体が、多分、今の自分のベースになってるし、仲間づくりとかも、多分そういうところできてきたんだろうなって思うし。何て言うんだろう。佐川先生が言っていた、「人権教育は出会い」ということが、まさに同意なんですけど。本当に、人と人が向き合った時に生まれるその感覚みたいな。情報ではなくて、対面で話すことしか無理だなあって、今日も話を聞いていて改めて思いました。

人権教育とか、こういう場面っていうのは、大学でも全然なくて。授業で「人権教育」って確かにあるんですよ。取ったんですけど、それこそ情報を教えるだけなので、(身振り手振りを加えながら)「いついつこういうことがありました。こういう差別があって、こういう人がこういうことを考えてました」というだけ。なんか、それは「学習」じゃなくて、「勉強」みたいな。

～「わがこと」として考えられない気がする 答えの設定されているような学習～

(あふれる笑顔で)私は何が違うかよくわからないんですけど、なんか、テストのようなものがあるって、答えが設定されているようなもの。そういうのが主だったんですけど。確かに、そういう勉強からは世界中のいろんな問題とか知れるし、ツイッターとかインスタとか、いろんなネットでツールがあるので、日々のいろんな問題がどんどんどんどん出まくって、いたるところで見れる中で、それを受けても、自分のことにして考えられない人がたくさんいるのは何でだろうかと、私は考える中で、やっぱり中学生集会みたいな一つのつながり、心のつながり、あのような取組も知らなければ、自分のこととして考えるやり方のわからない人が多くなってしまうと思うんです。

2 中学生集会との関わりで見つけたもの

(照れくさそうに)上から目線で申し訳ないんですけど。情報を情報として理解して出すみたいな、そういうやり方しか知らない人は、「わがこと」に考えにくいような気がしています。いくら、「こういう事実がある」とか、習ったり聞いたところで、多分、根本的には何もわかっていない人もいるから、そこを突破するためにも、人との出会いをしっかりと自分に受け止めるためにも、自分の体験でいくと、中学生集会みたいな場所が自分のきっかけだったし、ずっとベースになっているんだなと思います。

目の前のことを、「わがこと」として考えられない状況で、何で世界を考えられるのかっていうのは、いつも思っているから。中学生集会って、同時多発的に、いろんな人の思いが浮き彫りになって、時には、辛いことや差別的な発言もあるし。でも、それはその人が、その時考えている本心なんだから、じゃあ、受けた子がどう返すか。それもそこに本当の意義があると思うから、それも実際直面してみないと感じられないことだと思うから。そういう場面とか瞬間に、何回も何年も経験して、すごい良かったなあって、改めて感じます。

なんか、すごく上から目線になっていますが(会場に笑いがあふれる)。ベースは、その時に「わがこと」として捉えて、自分を見つめ直すこともできたし、返すこともできた。そんなベースがあるから、今、社会に出て、今から問題に直面する場面があっても、ちゃんと自分なりに考えて、自分なりに本当のことを言おうとする意識があるんじゃないのかなあって思ってて。多分それは、さっき吉成先生が話してくれた、「すべての教育の中に人権教育の視点を」。それがまさにこれだと思っています。

「人権教育」は、人権教育だけで完結しないから、ありとあらゆる出来事に関わってくるし。それこそ芸術の分野なんかは、社会の抑圧にあった人が、吐き出せる唯一の手口だったりする場合もあって。それこそ絵画だったり、戯曲だったり、音楽だったり。ルーツをたどれば、そういう差別文化が発展して、ちゃんと

芸術文化として確立しているってということもいっぱいあるし。何だろう、すべての物事において、根底には「人権文化」であって。それはつまり、「人間のこと」だと思うので。それは「自分のこと」だと思います。

(いっばいの笑顔で)それが、徳島でそういう場所(人権を語り合う中学生交流集会や鳴門市人権地域フォーラム)があるのはすごいありがたいし、中学生とかの小さい時から、そういう場所が提供されているのも、すごい幸せだと思うし、こうやって人とのつながりと呼んでもらえて。今日も、こういうつながりができるというのも、やっぱり全部がつながっている気がするから、是非ともずっと続けてほしいと思うし、「続けていかなあかなあ」っていう気がしています。

今、実際自分の立場でどういうふうに貢献できるかというのは、具体的ではないんですけど、(ニコニコと)先生方のチルドレンなので。(会場に笑顔がこぼれる)また、多分(大学卒業後は)戻って来ると思うし、今日は、たまたまこの場所に座っていますが、別に上下とかなないから、この後、いっばい皆さんの話す機会があると思うんですけど、思ったことを同じ土俵で話ができたらなあって思っています。とりとめない話で申し訳ないんですけど、以上です。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございます。大学での人権教育の講義の話が出ましたけど、知識として学ぶことも大事です。知ることはすごく大切なことです。でも、それを自分の中でどう消化し、自分に何が問われているかということ、やっぱり語り合わなければ、「わがこと」にはなっていないですね。もし、大学で中学生集会のように「信頼と尊敬の絆」があって、そこに「安心」がある。自分の言葉で生き生きと語る場面があったら、すごい大学での語り合いの人権学習が成立していくと思うんです。

私は、実はいくつかの大学で、かつては「同和教育」、ある時期からは「人権教育」の集中講義を担当したことがあるんです。ある大学においては、3日間いただき、90分の講義の5コマ、結構な時間です。そして、最終日の3日目に、学生にマイクを握って、2日間のリアルな講義内容から学んだこと、思ったことを語ってもらうんです。すると、さらに10分、20分、語る学生がいます。自分の生い立ちから含めて。その学生の語り自身が、強烈な教材となっていきます。大学4年生を対象とした集中講義ですので、21歳、22歳、それ以上の年齢の学生もいます。それまでの人生の中で、ずっと心に秘めてきて誰にも語る事がなかったことを語っていった学生がいます。

本当に、「人間が人間として幸せになっていくというのは、このようにして幸せをつかんでいくんだろうな」と実感します。解放されていく喜び、一生涯このことは口にすることはなかったことが、安心して語れる。そして、誇りとなる。その受講した学生のほとんどが教師になっています。たった3日間の出会いが一生涯の絆になっていく。関係になってくる。これがやっぱりこの教育の醍醐味です。喜びです。

今年の中学生集会も、そのことを実感します。松茂中学校の1年生が意見発表で語った言葉です。

「人権学習の醍醐味は語るにある。」

(力を込めて)やっぱり、本気という言葉というのは心が熱くなるんです。いろんな思いがあふれてきます。差別の問題は、いじめの問題は、自分の中にあります。その問題とどう向き合っていくか。人を大事にするということです。人を認めるということです。幸せって何だという、生きることの意味を問い続けていく。そんな学びが、ずっと生き生きと子どもたちの言葉で展開されていく人権学習が、また、大人の中においても、自分の問題として、自分の言葉で語るといふ人権の学びが広がっていったらなあと思います。

限られた時間です。フロアから思いを語ってもらえたらなあと思います。発表したくてたまらんというまなざしがビンビン来ます。いきましょうか。前にマイクがありますけど、マイクの前でいいですか。では、どうぞ。

《フロア 八万中3年 KF》

八万中学校3年のKFといいます。今日ここに来て話そうと思ってたんですけど、パネリストさんにすごい刺激っていうかいただいたので、まとまっていないんですけど、(コーディネーターに確かめるように)感想という形で大丈夫ですか？それとも討論でいいですか？

(コーディネーターから「討論してもいいです。どっちでも言いたいこと言って。」声が返る)

言いたいことを言っていていいですか。僕は、この人権学習を始めてから思うようになったことがあって。助けられる人がいるのに見捨てるっていうのはどこか違うだろうと思って。「じゃあ助けられる人って何なんだ」と考えたとき、「自分は他人を助けてあげられるだけの人間」と、「自分が認めている人間」だけにしかできないと思ったんです。自信があるというか。

僕は、社会というか、実際の生活の中で、失敗を怖がっているなというか、心配性というか、何かを失敗することを恐れているような気がするんです。誰も助けられないと言ったらウソになるかもしれませんが、困っている人がいたりとか、目の前にしんどそうな人がいたりする。助けることのできる人が何人いるんですかと言われたときに、答えられる人間って、そういないと思うんです。それくらい、弱者救済じゃないですけど…、なんて言ったらいいんでしょうか……。

僕は、攻撃的な意味で人権を使ってしまうことがあって、「困っている人がいるのに、何で助けない」「何で守ってあげない」みたいな。助けられるなら助けようよみたいな押しつけ論というか、結構圧迫的な人間というか。

僕は守る人権が何なのか分からないんですよ。誰かを助けろとか、助けようよというのはわかるんです。たとえば、植物状態みたいな方っているじゃないですか。そういう方の人権って、誰が守るのかって問われた時、その人自身じゃないじゃないですか。植物状態の人自身ではないじゃないですか。考えられない、どうしようもできない。それは究極状態じゃないですか。差別とかいじめとか、どうしようもできない、そんな人をどう守っていけるのかと問われた時、僕は、何て答えたらいいんだろうってずっと思ってるんです。自分を守れずに他人を守れるのかっていう、人権の最大の問題点というか、課題というか、あるべき姿というか。そう感じた時に、出会いも確かに大事だし、一番過程とかも大事だと思うけど、人権を広げる方法というか、その一部でしかないと思ってしまいます。守る人権ですよ。

先生方とか、パネリストの方々に聞きたいんです。なぜ守れるのかっていうこと。なぜ守ろうとするのかということ。どうすればいいのかということ。聞きたいです。

《コーディネーター 森口健司》

まず一つは、「わかってない」という自分に気付く。全然わかっていなかった自分が、わかったふりだけしていた自分に気付く。わかっていないということに気付く、そこから深い絆が生まれていく。そのことをずっと強く思ってきました。1人ずつ思ったことを、ちょっとどうですか。

《パネリスト 吉成正士》

何を答えたらいい？

《フロア 八万中3年 KF》

どうしてやることができるのか。どうして対応というか、自分で考えられない人とか他人を救うこととか、なぜそういうことができるのか、その理由というか、根拠というか。

《パネリスト 吉成正士》

(何が返せるか、懸命に言葉を探しながら)……ええっとね、あんまり難しくないよ。そんなに難しい話じゃなくて、自分がされて嫌なことは、他人がされても嫌なことじゃないのかな。人それぞれの価値観があるから、自分がされて嫌なことも、他人は、「いや、そんなことはない。自分は大丈夫よ」ということもあるかもしれないけど。

「不可侵 不可被侵」っていう言葉がある。ちょっと難しい言葉かもしれないけど、松本治一郎っていう人の言葉なんですね。「侵すことがない。侵されることもない」っていう言葉なんです。なるほどそうだなと思っっているんです。その言葉に対して。「自分が侵しはしないし、自分も侵されない」そういうことを描いていきたいっていうかな。そういうのが根底にあるような気がするんです。されて嫌なことは、他人にもしない。でも、他人がされていたら「何だ、この人」と、感情的になって許せない。そういうシンプルなような気がする。許せないのよ、とにかく。そんな気がする。

私はややこしい人間なんだけど、納得いかないことは、とにかく納得いかない。とことん納得いかないのよ。自分が納得いかないことは梶子でも動かないっていうところがどこかにある。

私が高校生の時に、全校集会で、1500人くらいの前で校長先生がお話されていて、納得いかなかったことがあって。校長先生が言っていることが納得いなくて。納得いかないから、その集会が終わった後、校長室に行ったんです。「あの話はどういう意味なんですか？」って。納得いかないから、自分の話をした。校長先生もちゃんと聞いてくれた。で、納得いって校長室を出た。ただそれだけ。

だから納得いかないことはとことんやってしまう質なのかもしれない。そういう性質なのかもしれない。(それでいいんですかね)自分でもいいかどうかわからない。けど、そうするのが自分なんだろうなという気がする。

《フロア 八万中3年 KF》

ありがとうございます。迷っていたんです。自分の中で人権ということに。自分の生き方を貫くのが人権って発想が僕にはあって。自己中かなと思ってたんです。友達とかにも、「自己中じゃない？」って言われるんです。でも1回しかない人生、ちょっとの自己中くらい通せよって思うんです。(登壇者より、「わかるわかる」声がかかる)それでいいのかなっていうのがあったので、ずっと質問したいなというのがあって。

《パネリスト 吉成正士》

だから、私に関わる人間は、振り回されてすごく迷惑をかけていると思う。(会場に明るい笑い)そんなもんじゃないのかな。

《パネリスト 佐賀みこと》

ちょっと、もしかしたらKF君の聞きたいことと違うかもしれないけど。さっき助けられる人がいるのに見捨てるのは違うと思うって言ってたやん。私も、結構そういう思いがずっとあったんやけど。

何ていうか、ずっと自分の中で疑問なことがあって。先生にももしかしたら、どこかで話したことがあるかと思うんですけど。自分の弟がダウン症で、結構重度。ダウン症の中でも重度の方やから。今、高1の年齢なんだけど、小・中と学校でいろいろあったり。実際理不尽なこととかもあったり。それはうちは直接体験してないから、本人からも状況が聞けないから、わからないことがあって。どういうことが起きている

か分からないまま、その状況を改善するために、自分たちの家庭の中でも結構大変なこともあったりもしつつ、それこそダウン症の方のコミュニティでふれあったりとか。特にダウン症の方とふれあうことが多くて。

自分はそういう生き立ちというか、今まで生きてきたなかで感じてたのは、ダウン症の方たちを守る立場だと思ってた。ずっと。何かダウン症の方が、例えば町中で困ってたら助けたりとか。社会で抑圧にあったら、動ける自分が動いて、もっとよりよくみんなが生きれるようにしたいとか思ってた方やった。けど、例えば町中で実際にダウン症の方と会ったときに、無性にすごく涙が出てきてしまうとか、なんだろう。他にも町中にはすっごくたくさん人間がいるなかで、なぜかダウン症の子、ダウン症の方だけにそんなふうに反応してしまう自分がいるんよな。今も、実際。それは私はずっと、そういうダウン症の方を守りたいからそう思ってるって思ってたんだけど、もしかしたらそれって、自分のある種の差別意識的なものから来てるのかもしれないって最近思うようになって。「助けたい」とか「助けてあげる」とかいう立場ではないかもしれないって思った。最近はその「助けてあげる立場」っていうのは、もしかしたらいいのかもしれない。なぜなら、全員が助けられる立場だと思うし。どんな問題に直面して、自分が例えば当事者じゃなかったとしても、仲間として何か発言できるかもしれない。それはもしかしたら、自信からくるものとかではないのと思う。自信だったり、自分の意思だけじゃどうにもできん状況っていうのが訪れたときに、そこでももしかしたら、出会いとか人のつながりっていうのが必要なかもしれない。それで仲間がいるからこそ、どうにもできんかった自分を、自分で自分を責めるだけじゃなく、みんなで共有することができるし、そこからみんなで、その問題に立ち向かうこともできるかもしれない。確かに出会いとか語り合いはプロセスでしかないのは事実。だけどそこで癒やされる。自分自身とか誰かが癒やされるってことを、もしかしたらもっと重要視してもいいのかもしれない。結果だけ見たら、実際差別がどんどん生まれて、でもなくならなくてっていう状況で、本当に先がずっとずっと見えないから、ずっとしんどいと思う。だから、目の前の人と…。なんか変な話になっちゃったんですけど、自分はこういうふうに今考えてるかな、はい。

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。同じ八万中学校の仲間として、STさん、語りましょうか。

《フロア 八万中3年 ST》

八万中学校3年のSTです。あんまりいいことを言えないので、人権を語り合う中学生交流集会について話したいと思います。

私は、中学1年生の時とか小学校の時は、あんまり人権学習とかが好きではなくて、人の意見を聞くっていうのは好きだったんですけど、自分のことを話すとかはあまり好きじゃなくて、人と違ったこととか間違っただけを言って、発表に失敗するって言ったら何ですけど、他の人と違うことをするのが怖くて、好きじゃなかったんですけど、友達の影響で2年生から参加するようになって、今、3年生で本大会が終わって、会のお陰で自分の中でいろいろ変わったことがあって。

友達がいたんですけど、中1のタイミングで、その子が学校に来れなくなってしまって。中2の時に、その子は転校してしまって全く会えてないんですけど、そのことを話すのが、今までどうしても嫌で。向き合って自分が傷つくのが嫌で。その子のために書いた手紙とかもあったんですけど、その子のために書いたっていうよりは、先生に頼まれたからとか、なんか、せなあかんというのでやった感じで。本当にその友達のことを考えていたんかなって思ってしまった。「してあげる」みたいな感覚になってしまって。それがどうしても嫌で。

さっき、KF君の言った、「困っている人がいたら助けてあげる」その考えが、その時は、自分に当ては

めてみたら、「してあげる」っていうのは、自分が上に立っているみたいな感覚があつて。中3までそんなに話すことがなくて、今も話したら、ちょっとまだ話すのあんまり好きじゃないんですけど。

話を聞いているだけではだめですけど、本大会で作文発表とかで発表したりもできるようになって。会に参加する前は、友達が学校に来なくなったっていうのもあって、自分が傷つけてしまうんじゃないかと思つて。(涙を懸命にこらえながら)今もですけど、あんまり友達と関わるのが怖くて、その子のためにしてあげられることがないんじゃないかなと思つて。

今も時々悩むんですけど、何もできない自分が、「何もできない人」で、「何も持っていない人」って思つていて。その時にこの人権の会に参加したら、会に参加したっていう、持っている人になれるんじゃないかと思つて。最初は、友だちについて行くみたいな形で行って、語り合っている姿とか見て、自分が話したことに返してくれるところが嬉しくて、それで、段々話すのが好きになってきたんですけど、……話がまとまらなくて、わからなくなってしまっているんですけど。

私が交流集会に参加して、一番変わったところが、友人関係に関しての考え方で、人に対して話す時の考えが変わって。すごく心が楽になって。人と関われるようになったので、そういう会に参加できたことがすごく幸せだったし、今は、悩んでいる人とかに寄り添えるようになればいいなと思つています。終わりです。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

中学生集会、とにかく感動します。司会進行する中学生の姿に感動します。午前の部の全体会で、語ってくれたパネリストのシンジ君に、尊敬の言葉を語る中学生に感動します。感謝の言葉を返す中学生に感動します。

「吉成先生、手を挙げていましたよね。意見をいいですか？」

先生を指名する中学生に感動するんです。それは何かって言ったら、ひたむきだからです。その一生懸命さに感動するんです。それが人権教育の喜びです。

自分の言葉で自分のことを安心して語れる教室をつくるんです。学年にするんです。学校にするんです。人権という学びが一人一人の中に沁み込んでいったら、やっぱり私たちの生きる社会というのは、私たちの家族というのは、本当に豊かなものになっていくし、誇らしいものになっていくし、幸せを実感していく1日1日が、私たちの中に広がっていくと思うんです。

私は冒頭に言いましたが、教師になって41年です。こんな幸せな41年が私にあるとは夢にも思いませんでした。大学に行かせてくれた父親、母親に感謝しかない。それがなかったら、この仕事には就けていません。本当にこんな出会いが、こんなつながりが待っているとは夢にも思いませんでした。

それはやっぱり、自分を語るということです。自分を伝えるということです。伝えたら必ず返ってきます。何か返ってきます。その何かを自分の中で噛みしめ噛みしめ歩いていくんです。

「シンジさん、すごいです。」

中1の男の子が語る。

その子の人権作文について、

「すごい人権作文を書いてくれて、こんなのではダメだとまた自分の人権作文を膨らませた。」

という言葉、中学3年が中学1年に語ってくれる。

そんなやり取りに出会える私たち教師は、本当に幸せでした。

毎年、中学生集会は幸せを実感するんだけど、もう、本当にアツという間の1日でした。

この記録はまた宝物です。そういう場をつくってくれたみんなに感謝します。じゃあ、中学1年生いくか。

それでは、マイクを渡してください。その場でいこう。

《フロア 松茂中1年 YI》

松茂中学校1年、Y Iです。先程の話と大分変わりますが、僕は、歴史が好きなんですけど、歴史人物の中で、全員が悪いイメージを持っていると思う、まあ、思っていない人もいると思うんですけど、そういう(悪いイメージを持っている)人に言いたいんですけど、全員が全員悪いわけじゃないということを言いたいんですけど。

僕は自由研究で、「武田信玄」について調べたんですけど、武田信玄が残した言葉で、「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇(あだ)は敵なり」という言葉を残しているんですけど、そこから、人に対する大切さとか。これの意味なんですけど、農民に向けられた意味なんですけど、農民がいるからこの国が栄えるというものなんですけど、そこから武田信玄は、人に対しても優しいイメージを持っている人だということがわかります。

後、また、武田信玄なんですけど、戦国武将で戦いばかりしているっていうイメージあります。ですけど、武田信玄は、意味のある戦い以外はしなかったということがあるんですけど、そう考えると、戦いばかりして意味も何もないのに戦いばかりしているわけではなくて、ちゃんと意味のあることをしていて、やっぱり、…ちょっとこんがらがっているんですけど。

やっぱり、よい歴史上の人物もいて、全部が全部悪いイメージを持たなくてもいいと思いました。後、佐川さんが言っていた、「思ったことを行動にする」みたいなことなんですけど、それ自体が起こすのは難しいですけど、勇気を出すのって難しいですけど、……最近のニュースで、統一教会が何とかって言っているじゃないですか。あれって考えてみたら、あれを信仰している人にとったら、宗教を否定されているようなもので、心が痛いと思うし、ある意味、それはそれで、ニュースとかで悪いイメージを与えているのは、やり過ぎだと思うので、ある意味そこには思いやりというものはないんだろうかと思います。ありがとうございました。

《コーディネーター 森口健司》

あと、時間が来ていますので、CSさん、お願いします。

《フロア 東京都 CS》

東京で小学校の教員をしています。CSと申します。私は愛媛県出身で、7年間愛媛で教員をして、東京に来て、今年26年目になります。東京の方が長くなっているんですけど、愛媛で育って、愛媛で教員生活をスタートしたので、私の土台が愛媛にあると思っています。

私が、小学校6年生の時に、私の地域に(同和対象地区)学習会ができました。できたばかりだったので、差別に負けない子にするみたいな、そこまでは行っていなかったと思うんですけど、私は学習会に行っていたので、うちの親が「同和地区出身なんだよ」と言わなくても、まあ、大体わかっていたという様な、そんなところですよ。

中学校になっても学習会があって、学力保障しかやっていないような中学生時代だったので、愛媛で教員生活をしていた時の、4年目か、5年目の時に、隣の教員住宅に住んでいた中学校の先生が、「徳島に板野中学校ってすごい同和教育を実践をしているんだよ。一度行ってみるといいよ」って言われながら、ちょうど、愛媛県の南予地方から徳島って対角線上で、とっても移動に時間がかかるんですね。

結局、愛媛県時代は、とても時間をかけてここに来ることはできず、今、東京に来てから、森口先生や吉

成先生と出会うことができました。その出会いによって、今、私がここにいるという経緯があります。

なので、皆さんのお話を聞きながら、いろいろ思ったこと話しますが、まず、中学生の皆さんのお話で、KF君が言っていたことで、私の姪が、ダウン症で、今、20歳なんですけど、検査をしたら、知能が2歳児くらいと言われてます。もう発達しないよと言われてます。

(切々と)去年、私の母が亡くなった時に、彼女は、神奈川県川崎市から車に乗って移動して、愛媛に来たんですけど、公共交通機関を利用すると、この子のために休息するということができないので、車で休み休み移動したんですが、彼女にとっては、おばあさんが亡くなったこともわかっているかどうかもわからない。そこで私たちが何ができるかって言ったら、何もできないんですけど、もしかしたら、彼女なりにおばあちゃんが亡くなったことを察知して、だから、自分にとって一番悲しい移動をして、その悲しい気持ちを乗り越えるために、なんだかわからないけど、自分の一番尊敬する叔母を、お葬式の時も、ずっと見続けていました。

葬式の場所には居られなくて、ちょっと外れるところにいる。それを家族や親戚で温かく見守る。それしかできなかったんですけど、でも、もしかしたらって想像する。それが私たちができることだなんて。その後も、移動が大変なので、「頑張れなくてもいいよ」って親戚の人たちも、彼女には言っていました。できることは少しでも頑張ろうとするっていうのが、少しでもできることかなと話聞きながら思いました。

それから、STさんの話を聞いて、「もしかしたらしたら、私が彼女を傷つけたのかもしれない」って、思えるその想像力っていうか、(STさんに温かいまなざしを送りながら)その、あなたの気持ちがすごいなという、それを皆さんに公表して言ったり、作文に書いたりするのが、私はすごく優しいなあって思いました。

それから、YI君が、武田信玄の話をしていたんですけど、私は大学の時に山梨県にいたので、「武田節」という歌を、飲み会の時にみんなでよく歌ったり語ったりしていたので、そこで、「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇(あだ)は敵なり」という歌詞があるんですね。その歌詞の意味を今初めて知ったので、(嬉しそうに)ここに来て1つ勉強になったなと思いました。その、農民のことを大事にしているなんて知らなかったの、ありがとうございます。

それから、最後に「破戒」のことなんですけど、「破戒」の映画を(東京でも)まだ3カ所しかやっていないくて、観に行きました。

私は、今、東京での6校目の学校に勤めているんですけど、過去2カ所で同じ学校だった、結構仲良しの先生がいるんですけど、その人が、長野県出身で映画の最初に出てくる「飯山」というところの出身なんです。当時は、長野県での小学校・中学校の時に、道徳の授業がなかったそうです。「長野県は、長野県独自で同和教育をやっているの、一般的な道徳の授業が一つもなかった。なのに、私が東京に来て、道徳の研究校に初任校で、しなくてはいけなくて大変だった」と言うんですね。

じゃあ、長野だし、「どれだけ素晴らしい同和教育を受けたのかなあ」と思ったんですけども、でも、「地区出身の人なんかいるの？」って言うんです。「私がいる」と言えない自分がいます。彼女をとて信頼しているし、クラス経営とかすごく上手だし、私にわからないところも、とってもいい授業をするんですね。だけど、その人が「誰のためにこの勉強をしているのか」みたいなことを言う。それを直接聞いて、語り合えないショックというか、本当は話したいけど、そんな時間もないし、「まあ、ちょっと言っても無理かなあ」とあきらめている私もいるし、それが、私の今の課題なんですけど、「この人には言えるから」とって安心できることもあります。「ここでは言わない方がいいな」と分けているところもあります。

でも、他の部分で彼女をつながって、支え合ったりしている部分もあるので、その一つで彼女を否定することはできないんですけど、まあ、つながる中で、この後、語れることがお互いの中で生まれることがあれ

ばいいなと思って生活しています。以上です。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。人権教育の出会いは、宝物です。今日、出会えたことが、中学生のみんなにとって大きな宝物となり、貴重な1日になっていきます。そういう出会いを重ねながら、人間ってというのは、本当に豊かになっていくし、幸せになっていくんです。それが人権教育の喜びです。最後、パネリストの3人で締めてもらいます。あまり時間がないんですけど、頑張ろうね。佐賀さんからどうぞ。

《パネリスト 佐賀みこと》

今日は、本当にありがとうございました。本当はもうちょっと、みなさんと話ができたらよかったと思うんですけど。自分もまだ未熟だし、まだまだこれからいろんなことに直面していくし、もっといっぱい考えていかなと思うんですけど、今、このタイミングでここに来れたことが、とても幸せにありがたく思っております。

皆さんのお話を聞いたこともすごいよかったし、中学生の子から聞いたことも、自分の中にスッと入ってきて、自分の中でも持ち帰れそうです。ありがとうございました。

私は、今日のこの場にいる人は他人じゃないと思ってるから、教育長さんも含めてですけど。みんな友達だと思っているので。(会場が明るい笑いで包まれる)聞いただけでなく、誰か喋れば、絶対誰かにつながると思うので、何か話したければ、いつでも言ってくれていいし。自分でよければスマホで入れてくれていいし、先生や周りも聞いてくれるので、中学生集会に行ったみんなもきっと同じだと思うから、いろいろこのつながりを大事にしていきたいなと思います。ありがとうございました。

《パネリスト 佐川佳織》

今日は、ありがとうございました。さっき話ができなくて、先程のMさんの話しなんですけど、作文を読んで、その後、教室の方でも彼女が自分の気持ちを伝えることができ、「これからの自分を見てほしい」というようなことを、きちんと話ができたとつけ加えておきます。

Y I君が、発表の時に「行動を起こすことって難しいと思うけど」と言ってくれたんですが、私は、「行動」ってそんなに大きなことと考えていません。あなたが今日、この椅子に座っていること、それも私はすごく大きな行動だと思っています。夏休みに、「語ろうかな」「お話聞きに行こうかな」って、制服を着て足が向くこと、それは本当に大きな行動だと、私は思っています。

ここに来てくださっている方って、みんな、そんな思いで来ている温かい集まりなのかなと思っているので、私も思い切って前に立って、話をするという行動に移していると、自分で思い込んでいます。

今日は私もいろんな方の話を聞いて、これからの自分に胸を熱くしてワクワクしております。また明日から、私は教員としてですが、一緒に成長していけたらなと思っています。今日は、ありがとうございました。

《パネリスト 吉成正士》

今日は、ありがとうございました。佐賀さんが、「上っ面」っていうワードを出してくれたんですけど、「学校っていったい何だろう」と考えるんです。先程、武田信玄の話も出ていたわけだけど、例えば、私は、大学受験の時に、「水平社」って年表に出てくるんですよ。

「1922年水平社創立」って。

その前には、「島崎藤村『破戒』」って出ているんですよ。

受験をパスするためだけに覚えました。確かに。でもそれはね、受験をパスするために覚えただけです。だから中身を一切知りません。それでいったい何の意味があるかということですね。大学受験をパスするためには意義があるかもしれませんよ。だけど、もっと大事なことがあるでしょっていうことなんです。だけど、そちらの方にシフトしているような気がして、危機感みたいなものを感じるんです。「上っ面の教育、学習になってるんじゃないかな」っていうことです。

もっと大事なこととして言えば、実は、先週の土・日・月と、娘が和歌山で教員を始めたので、息子と2人で遊びに行っていたんです。月曜日に戻ってきて、火曜日、下の息子が大学4年で、どこに就職するのかという結果の出る日だったんです。

本人は、受かる気満々だったんです。1次試験もパスして、内定ももらって、2次試験も滅茶苦茶手応えがあったらしく、筆記もいけた。面接も完璧だった。もう、受かるとしか考えていなかったんです。ところが、火曜日の朝9時に発表があって、ダメだったんです。

本人とか、もう揺れまくってて、自暴自棄です。見ていて痛々しいくらいに荒れていました。火曜日の晩、水曜日の晩、昨日の晩。高知に下宿しているのが高知に帰ったんですけど、帰りの車の中で掛ける言葉もなかったの、言葉数は少なかったんですけど、火曜日の晩も友達とおり、水曜日の晩も友達とおり。

考えてみたら、我々って、長く人生を生きていたらいろんなことがあるじゃないですか。仕事がいまいかないこともあるだろうし、思い通りにいかないこともあるだろうし、人間関係で悩むこともあるだろうし、恋に悩むこともあるだろうし、へこむことって、いっぱいあってきたと思うんです。

時には思いがけず病気になったり、事故にあったりとか、死に直面したりとか、本当に人生っていろんなことがあると思うんですが、その度に自分の人生を振り返って思うのは、「いつも誰かがいた」ということを思い返すんです。家族かもしれないし、友かもしれないし、そんなふうを支えられてここまで来たと思うんです。息子を見ていて、一緒に居てくれる友達がいる、「友達がいて本当に良かったな。1人でいるのはしんどいぞ」って一言だけ言ったんです。そしたら、「そうやなあ」って言いました。

勉強ができることも大事だと思うんです。ICTも大事だと思うんですよ。けど、やっぱり仲間をつくることって、それに勝るものはないのと違うかなと思うんです。それを教育の場で、もう一回改めてねじを巻き直していくということが、放っておいてもできるかもわかりません。でも、みんながみんなできるとは限りませんから、仕掛けの中で、親しい友達をつくっていく、親友をつくっていく、仲間をつくっていくということをやっていく必要があるんじゃないかな。

そうなったら、孤独死ということも減るのではないかな。孤立して、自暴自棄になって、いろんな事件事故を起こすことも減っていくんじゃないかなって、そんな気がします。とりとめない話になりましたけど、また、皆さんとお会いできる機会があったらなと思います。ありがとうございました。

《コーディネーター 森口健司》

アツという間に時間が過ぎていきました。語ってくれた中学生、本当にすごいわ。自分の言葉で問いかけ、語ってくれる。そして、ずっとつないでくれる仲間。そんな仲間の存在は、生きる糧となっていきます。

CS先生、ありがとうございました。本当に救われます。やっぱり言葉というのは力をくれます。

スクリーンをご覧ください。

「ひとごと」から「わがこと」へ。

自分のことを安心して言える教室だったら、学校だったら、職場だったら、働く力、生きる力がどんどんどんどん大きくなっていくと思います。

自己をみつめ、語り、人と人とがつながる。本当にそんなつながりが広がっていく。これが、この教育の

喜びだと思えます。

次のスクリーンをご覧ください。

2015年に、ずっとお世話になってきた原田彰先生、この方は、長く徳島で大学の先生をされていた方です。徳島大学から鳴門教育大学、その頃からずっと交流があって、広島大学に異動されました。広島大学に行かれたことがきっかけとなって、私は広島大学で5年間「同和教育」の集中講義を担当するようになります。

その時に語ってくれた大学生の言葉というのは、その当時、集中講義は2日間だったんですが、2日間の出会いが一生の絆になっていく。大学生の語りというのはすごかったです。今も、鮮やかにその場面が私の中に生きています。

そういう出会いをさせてくれた原田先生が、板野中学校の全体学習がスタートした1990年度と1991年度の実践記録をもとに、どうして自己を語るという同和教育が展開されるのかということ、**「板野中学校の授業記録を読み解く」**という本を出されました。それが、(スクリーンを示し)**「差別被差別を超える人権教育」**という書籍です。

この本がきっかけとなって、板野中学校の卒業生たちが、このフォーラムに関わる機会が生まれて、その関わりが深くなりました。そして、2017年にこの壇上で話をさせていただくために、原田先生が来られました。その時、原田先生は**「フォーラムの最後に歌を歌いましょう」**と言われました。

その時に歌ったのが「サライ」という曲です。

そのサライの曲、その「サライ」が、私たちの中にどういう意味を生んできたのか。

谷村新司さんの「サライ」に深い思いがある吉成先生に、その楽曲と、これまでの人権学習の写真を編集したスライドショーを作ってもらいました。

最後に、「サライ」を聴いていただきたい、この会を終わりたいと思います。

まず、T-over人権教育研究所からのメッセージからご覧ください。

《音声：スクリーンの言葉》

語り合いの人権学習は、すべてを変える。

原点は、1990年度にスタートした板野中学校の全体学習でした。全体学習は様々な歴史を刻んできました。その営みは、このフォーラムでも度々紹介させていただきました。

1994年に徳島市で開催された第46回全国同和教育研究大会の前日に公開した全体学習は、全校生徒による谷村新司さんの「サライ」の合唱で始まります。それは吉成学級の子どもたちの提案によるものであり、子どもたちは自ら立ち上がって歌い始めます。

「サライ」は、全体学習の資料、丸岡忠雄先生の詩「ふるさと」とぴったり重なりました。

ふるさと

丸岡 忠雄

“ふるさとをかくす”ことを

父は

けものような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ

縊死した友がいた

ふるさとを告白し

許婚者に去られた友がいた

吾子よ
お前には
胸はってふるさとを名のらせたい
瞳をあげ 何のためらいもなく
“これが私のふるさとです”と名のらせたい

全体学習に寄せて、授業者の吉成教諭は、丸岡忠雄先生のふるさと・山口県光市高州を訪れ、丸岡忠雄先生宅を訪ねています。

部落差別により、一艘の船を出すことも許されなかった詩「ふるさと」の舞台・高州の海岸と、私たちの同和教育の師である佐藤文彦先生と丸岡忠雄先生、お二人が山口県光市で撮られた写真も収めることができました。

人権学習に問われているのは、教師の熱と光です。そして人権学習とは、命と命の対話です。教師の本気が子どもたちの本気の語りを生んでいきます。

そんな思いや願いの中で積み上げてきた全体学習と、ひたむきに自分をさらけ出した生徒たちの姿、またフォーラム終了後の交流会で「サライ」を歌った場面や、1994年の全体学習に寄せて送られてきた谷村新司さんのメッセージ「夢は夢にあらず」もご覧いただきます。

スライドは、2016年の鳴門市人権地域フォーラム、全体学習をリードしてきたパネリスト3名、1991年度板野中学校卒業生の写真からスタートします。

《動画》

サライ

作詞：谷村新司 作曲：弾 厚作

遠い夢 すてきれずに 故郷をすてた
穏やかな 春の陽射しが ゆれる 小さな駅舎
別離より 悲しみより 憧懐はつよく
淋しさと 背中あわせの ひとりきりの 旅立ち

動き始めた 汽車の窓辺を
流れてゆく 景色だけを じっと見ていた
桜吹雪の サライの空は
哀しい程 青く澄んで 胸が震えた

恋をして 恋に破れ 眠れずに過ごす
アパートの 窓ガラス越し 見てた 夜空の星
この街で 夢追うなら もう少し強く
ならなけりゃ 時の流れに 負けてしまいそうで

動き始めた 朝の街角
人の群れに 埋もれながら 空を見上げた
桜吹雪の サライの空へ
流れてゆく 白い雲に 胸が震えた

離れれば 離れる程 なおさらつる
この想い 忘れられずに ひらく 古いアルバム
若い日の 父と母に 包まれて過ぎた
やわらかな 日々の暮らしを なぞりながら生きる

まぶたとじれば 浮かぶ景色が
迷いながら いつか帰る 愛の故郷^{ふるさと}
サクラ吹雪の サライの空へ
いつか帰る その時まで 夢はすてない

まぶたとじれば 浮かぶ景色が
迷いながら いつか帰る 愛の故郷^{ふるさと}
サクラ吹雪の サライの空へ
いつか帰る いつか帰る きっと帰るから

《コーディネーター 森口健司》

多くの皆さんが、集い、声を張り上げ、「サライ」を歌える日が早く訪れることを念じています。

本当に人権教育の絆というのは、生涯の宝物です。豊かなつながりをもっともっと広げていきたいと思えます。夏休みの終わりにこういう機会をつくっていただき、また、力をいただきました。一日一日を大切に歩きたいと思えます。

これでフォーラムを終わらせていただきます。皆さん、長時間ありがとうございました。

《司会者》

森口さん、パネリストの皆さん、本当にありがとうございました。閉会にあたりまして、鳴門市教育委員会生涯学習人権課長よりご挨拶申し上げます。

《閉会あいさつ》

本日は、コーディネーターの森口先生、パネリストの吉成先生、佐川先生、佐賀さん、また会場の皆さん、本当にコロナ禍で大変な時にお集まりいただきまして、ありがとうございました。

本来でしたら、この人権地域フォーラムというのは、参加希望者が多くて、この会場が200人くらいが満杯になるくらいでしたけれども、新型コロナウイルス感染症拡大のために、少人数での開催となりましたが、本当に心に響くよい学習だったと思えます。こういったフォーラムをもっと多くの方に知っていただき、ご参加いただきたいと本当に強く思いました。ありがとうございました。

このフォーラム開催に際しまして、ご協力いただきました関係者の皆さんにも感謝申し上げます。ありがとうございました。これで閉会の挨拶とさせていただきます。(拍手)

《司会者》

以上をもちまして、令和4年度、鳴門市人権地域フォーラムを終了させていただきます。皆様、本日はお忙しい中ご参加いただきありがとうございました。